2008年６月15日(日)、16日（月）　ハーベストフォーラム東京　創世記２

創世記２　創世記１章２節

「カオスから秩序へ」

イントロ：

１．創世記１：１～３の解釈

(1) 創世記１：２の日本語訳を読み比べてみる。

（口語訳）「地は形なく、むなしく、やみが淵のおもてにあり、神の霊が水のおもてをおおっていた」

（新改訳改定３）「地は茫漠として何もなかった。やみが大水の上にあり、神の霊が水の上を動いていた」

（新共同訳）「地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた」

(2) 質問：神が創造された世界は、カオス（混沌）なのか。

(3) これにどう答えるかで、その人の聖書観や世界観が決まってくる。

２．きょうの箇所は、私たちにとってどういう意味があるか。

(1) 人生の座標軸を持つ必要性がある。トータル的な聖書の理解。

(2) サタン（悪）の存在をどう理解するかが決まる。

(3) どういう終末論を持つかが決まる。

(4) いかに生きるかが決まる。

①未信者からクリスチャンへ

②霊的な幼子から、成長したクリスチャンへ

創世記１章２節は、私たちの聖書観と世界観を規定する。

Ⅰ．創世記１：１～３を巡る３つの立場

１．Original Creation View（オリジナル・クリエイション・ビュー）

(1) 創世記１：１は、創造の６日間の第１日目に含まれる。

(2) 神は最初にカオスを創造し、そこから秩序ある世界を仕上げていった。

２．Pre-Creation Chaos View（プリ‐クリエイション・カオス・ビュー）

(1) 創造の前から、何らかの理由でカオスが存在していた。

(2) 創世記の創造記事は、絶対的（無から有）創造ではなく、相対的な創造である。

(3) 創世記１：１は、天地創造記事の要約か、あるいはイントロダクションである。

(4) ２節は、神の創造の材料となるものである。
(5) ３節以降は、具体的な創造の方法を記している。

３．Gap Theory　あるいは、Restitution Theory（ギャップ・セオリー）
(1) 創世記１：１と２の間に、時間的な隔たりがある。
(2) １節：天地は完璧な状態で創造された。無から有の創造。
(3) ２節：完璧な天地が、カオスになっている。
①「トーフー・ワ・ボーフー」という３語がカオスを表現している。
②「トーフー」と「ボーフー」が対になって登場するのはイザヤ34：11、エレ４：23。
③ともに、裁きを表している。
④１節と２節の間に、サタンの堕落がある。
⑤長い時間を想定する必要はない。
⑥恐竜の生存をここに入れようとする人がいるが、それは不必要であり、非聖書的。
(4) ３節以降：神による回復の業

Ⅱ．創世記１章２節

１．１節の最後
(1) 日本語訳には出てこない。
(2) マソラ本文には、１節の最後に「ラフィア（休止符)」が打たれている。
①つまり、１節は、独立した叙述文である。
②要約、イントロダクションではない。次に続く文章でもない。

２．「ワ」という接続詞
(1) 次に続く文章ではないので、「And」（そして）とは訳せない。
(2)「Now」（さて）が正しい訳である。

３．「地」という名詞
(1) ヘブル語では動詞が先に来る。名詞（主語）が先に来るのは、新情報を付加するため。
(2)「地」の状態を表す動詞は、「ハィエター（ハヤー)」という動詞。
①通常は、「was」（であった）と訳す。
②ここでは、「became」（となった)と訳すべきである。

４．「トーフー・ワ・ボーフー」という３語

(1) サタンの堕落の結果（エゼキエル 28：11～16）
①神の御座
②地の管理人。宝石の園。海はない。
③サタンの堕落。カオスの出現。

５．闇という名詞
(1) カオスを表す言葉。
(2) 裁き、滅び、絶望、死、サタンとの関連
①出エジプト 10：15、21～23、Ｉサムエル２：９
②エペソ６：12

６．大水という名詞
(1)「テホム」であり、深い淵、深い水を指す。
(2) 混沌として塩水の淵が、かつて栄光の輝いていた地をおおっている。

７．神の霊という名詞
(1) ここから、希望が始まる。
(2) 三位一体の神の第三位格

８．動いていた（おおっていた）という動詞
(1)「メラヘフェット」という動詞。震える、羽ばたく、宙に舞う。
(2) 手厚い保護の下に置かれている状態。
(3) 母鳥が卵を抱き、孵化させようとしている状態。
(4) マタイ３：16 と関係あり。

９．水という名詞
(1)「マイム」と「ヘホム」とは違う。
(2)「マイム」は命を与えるもの。
(3) 聖霊によって、カオスが秩序あるものに変えられ、命が誕生しようとしている。

結論

１．創世記１章１節と２節の間には、ギャップがある。
(1) サタンの堕落
(2) 被造の世界に下った裁き

(3) そこからの回復の業

２．聖書理解と信仰の成長

(1) 十字架は信じるが、復活は信じがたいという段階。

(2) 復活は信じるが、再臨は信じがたいという段階。

(3) 再臨は信じるが、千年王国は信じがたいという段階。

(4) 千年王国は信じるが、新天新地は信じがたいという段階。

(5) 新天新地まですべて信じるという段階。

３．信仰の土台

(1) 字義通りの解釈

(2) 再臨の後に出現する千年王国は、アダムの罪によって呪われた被造の世界の回復。

(3) 千年王国の後に出現する新天新地は、サタンの罪によって呪われた世界の回復。

①黙示録 21：１～22：２

②そこには、海は存在していない。

４．創世記１章２節は、１節と３節のつなぎである。

(1) 次回は、３節から学ぶ。

(2)「光あれ」ということばには、私たちの人生を変える力がある。